

- 特集・1
「実験映像」と映画の
「実験性」
- 特集・2
CINEMA SELECTION・
先生がすすめるこの映画

IMAGE LIBRARY NEWS

●●イメージライブラリー・ニュース 2000年4月 第3号●●

イメージライブラリー・ニュースは4月・6月・9月・11月に発行の映像に関するミニ情報誌です。バックナンバーについては館内の受付カウンターにご相談下さい。

特集・1

「インタビュー」 黒坂圭太 (映像学科助教授)

聞き手 狩野志歩・下川久美香

「実験映像」と映画の「実験性」

映画が誕生して100年余り。カメラを手にした人々は、この新しいメディアになんとかして新しい文法を与えたいと試行錯誤をくり返した。そんな中で「実験映像」や「アバンギャルド映画」と呼ばれる映像形態は、必然的に姿を現すこととなる。それはシュルレアリズムや抽象表現主義など同時代の芸術運動と歩みを共にしながら、常に新しいイメージを生み出してゆき、また社会に対して強烈なアンチテーゼを投げかけてきた。しかし、芸術界にも社会においても、もはや新しく大きな運動の存在しない現代において、私達は「実験映像」というものをどう捉え、接すればいいのだろうか？

狩野 黒坂先生は現在、作家としても積極的に活動されています。そのラジカルな映像作品はアニメーションの技法を使いながら、実験映像として語られる場合も多々あります。今回は先生の制作を通して日頃感じてもらえる「実験映像」についてお話を伺いたいと思います。

黒坂 「実験映像」は基本的にジャンルの名前について風風と考える方がいんです。日本に限って言えば、確かに今から10〜15年前位前の状況だと、スタジオシステムではない、いわゆる個人映像作家やビデオアートをやっている人たちのことを説明するのに、多少乱暴ではありますが「実験映像」という言葉で括れてしまっています。そういうことをやっている人たちが少なかつたんです。ただ、そういう世代が人に教えるようになって、その孫弟子位の世代がいろいろな分野に入ってきている今は、もう特定のセクションでは括れないですね。映画↓テレビ↓ネットへというツールの問題とも絡んでくるんですけど、とにかくこの10年間で、映像の作り方や考え方が自分で変わってきたと思うんです。僕が映像を始めた80年代頃には、「実験映像界」みたいなものは確かにあったんだけど、今はもうないといっていると思います。だから、なんか目がチカチカする映像だとか、友だちにカメラを持たせて自分を撮ってもらったのが「実験映像」なんだみたいな、そういうスタイルや具体的な「実験映像作家」という職業がある訳ではなくて、これは前向きに何かをやるうとしていっている人だったら、否応も無く無意識のうちにやっていることだと思っただけです。単純に言ってしまうと、今まで自分が見てきたいろいろなものがあったって、けどまだ何か物足りない、もっと素

敵なすばらしい世界ってあるんじゃないか、それは何なんだろうって考え始めた時からもう既に実験映像という映像行為がスタートしていると思っただけです。もし自分がやらなかったら、多分絶対にそういう素敵な世界を誰も見ることができないだろうって、そういうものを作り出していく気持ちのことを実験精神って言うんです。

狩野 そうですね。それはどんな創作活動にも言えることだと思っただけです。絵画にしても彫刻にしてもその精神なしに発展はなかったのではないのでしょうか。

黒坂 そうそう。つまりなぜ実験絵画だとか実験彫刻だとか言わないのかっていうと、いわゆるフライングアートの場合、ある意味その実験というのには、ラスコー洞窟の絵で足を實際より大きく描いて、より走っているように見えるのと、そういうことを始めた段階で既に始まっているので、基本的に実験がイコールより次に行くために必要なことという、造形美術の世界では当たり前のことなんですね。それから、造形美術というのは基本的に個人でできるものだっていうこともあると思っただけです。ところが映像というものはもともと個人でできるものではないし、お金がかかる。そういう問題があったとしても、鉛筆一本あればできるものと比べると、本当はものを作っていく上では当たり前のことができないっていうところがあるんです。それで結局個人レベルでできる小規模なものにならざるを得なかつたんです。ただそれは結果であって、実験映像は個人映画とか短編映画ではないんです。そのところよく誤解されるんですが、商業的な映画をいたずらに否定して、あまのじゃくに正反對なことをやってみるなら、あまのじゃくが実験なんだとか、まるで売れないことが武士の勲章みたいなとんちんかんかんとを思っている困った人たちがいるんですが、そういうところが逆に足枷をかけてしまっているところがあると思っただけです。確かに、かつてはアバンギャルド運動の中で商業映画に対してアンチであったのですが、今はやっつきりした敵が見えにくくなっているというか、もうないと言っている状況なんですよ。だから何かに対して戦うことなんでもう古いのかって思っ



都内の仕事場にて

ていたんだけれども、数年前からそうじゃないんだと気がついたんです。戦う相手って実はいたんですよ。何かっていうと、それは自分自身なんです。昔のアバンギャルドって他人をやっつけて、それを越えて何かを築くということだったんだけど、もう今はそうすることに何の意味もなくなっている。そうすると、戦うべき相手というのは、結局昨日までの自分ではないんじゃないかと思っただけです。今までやってきたスタイルがあつて、それが自分なんだっていうものがあるじゃないですか。それこそが既成概念であつて、そいつにいつもアンチであり続けるということ、それなんです。わかりやすく言うと、いわゆる前衛的スタイルの制作を続けている人が今日も明日も続けている限り、その人というのは「前衛」というスタイルをひたすら守り抜いている保守派」なんです。どんな過激なものであつても、そういう「過激なもの」っていうスタイルを守っているところにおいて、自分に対するアイデンティティの問いかけというものが何も無い訳ですよ。逆にそのスタイル自体は取り立てて新しいものでも何でもないけれども、自分にとって全く初めての表現領域でどうしても作りたいって思いする時がありますよね。その時の、自分が自分じゃないものに変わっていく、何かこう自らを解体していくようなワクワクとした興奮っていうのは、必ず作品の中にオーラみたいな出てくるような気がするんですよ。おそらく、「実験映像」だとか「実験精神」だとかいう言葉にとらわれているうちは、まだ真に実験的で創造的な精神が開放されていないんだと思います。それが100%全開できた時に初めて「実験映像」はその役目を終えて永遠の眠りにつくのだと思います。

◆◆◆
既存の映像スタイルを打ち破って、かつて誰も見たことのない新しい世界を切り開くものとして存在した「実験映像」は、おそらく既にある文脈では語りきれない、何にも属さない存在だからこそ前衛であり得たのだろう。そうした外部に対する問いかけは、今や作り手の内部へとその舞台を移している。自分の中に存在するあらゆる保守的なものに対していかに挑んでゆかか、その作り手の意識こそが「実験性」として作品の奥深くへ浸透してゆくのだからという先生の考えは、制作者としての自身の意志でもあるようだった。

(黒坂先生の作品はライブラリーで見ることが出来ます。)

今泉 洋

デザイン情報学科
(デジタルメディア)



●どですかでん

監督/黒澤明
一九七〇年 [邦画 LD]

個性的なキャラクターが織りなす奇妙な関係、過剰な色やフレーミングへのこだわりが生む非日常の世界の力強い存在感。見終わった後に夢の記憶のような違和感が残る。劇場映画が映像による最良のストーリーテリングとなりうることを示した黒澤明監督初のカラー作品。



「どですかでん」東宝

●欲望

監督/ミケランジェロ・アントニオーニ
一九六六年 [洋画 LD]

●二〇〇一年宇宙の旅

監督/スタンリー・キューブリック
一九六八年 [洋画 LD]

●沈黙の世界

監督/ジャック・イブ・クストー
ルイ・マル
一九五六年
【ドキュメンタリー VHS】

●エレファント・パート

監督/ウィリアム・ディア

●モデル

監督/フレデリック・ワイズマン

逢坂 卓郎

空間演出デザイン学科
(光)



●コヤニスカッツィ

監督/ゴッドフリー・レジオ
一九八二年 [洋画 LD]

当時、無名のレジオが世界中を取材し、近代社会の光と影を浮き彫りにした映像詩。自然や都会の姿を多角度から撮影。フィリップ・グラスの音楽を取り入れたミニマルな映像は、八〇年代のクリエイター達を刺激した。コッポラが惚れ込んで配給元となった話は有名。



「コヤニスカッツィ」パイオニアLDC

●二〇〇一年宇宙の旅

監督/スタンリー・キューブリック
一九六八年 [洋画 LD]

●ノスタルジア

監督/アンドレイ・タルコフスキー
一九八三年 [洋画 LD]

●パワーズ・オブ・テン

監督/チャールズ&レイ・イームズ
一九七七年
【実験映像 LD/VHS】

●事の次第

監督/デヴィッド・ヴァイス
ピーター・フィッシュリ
【実験映像 VHS】

●ナショナル・ジオグラフィック
生命のリズム 一九九六年

【ドキュメンタリー VHS】

特集・2

CINEMA SELECTION

先生がすすめるこの映画

鬼丸 正明

保健体育(スポーツ映像の社会学)

●フィルム・ビフォー・フィルム

監督/ヴェルナー・ネケス
一九八五年 [アニメ VHS]

映像体験とは運動体験であり、映像の始源的快楽はものが動くことへの驚きから生まれる。映画誕生以前の映像装置の歴史を横断するこの作品は、映画が運動の面白さを追求する多様な試みの中から生まれた事を語ってくれる。



「フィルム・ビフォー・フィルム」ダゲレ出版

●セブン・チャンス

監督/バスター・キートン
一九二五年 [洋画 LD]
スラップスティックの大傑作

●キング・コング

監督/メアリー・C・クーパー
アーネスト・B・シエードサック
一九三三年 [洋画 LD]

ワイリス・オブライエンの作ったコングの動きを見よ!

●フットライト・パレード

監督/ロイド・ベロコン
一九三三年

●血煙高田馬場

監督/マキノ正博、稲垣浩
一九三七年
チャンバラを見直そう!

●動くな、死ね、蘇れ!

監督/ウィタリー・カネフスキー
一九八九年

今野 勉

映像学科(演出論)

●影

監督/イェジー・カワレロウィッチ
一九五六年 [洋画 VHS]

最も衝撃をうけ、影響をうけた作品。三つの無関係に見える事件を通してポーランドの歴史と政治の暗部が浮かびあがってくるミステリー映画。私はこの映画をモデルに、のちに「七人の刑事」の一本を演出した。が、その作品は放送されることなく終わった。



「影」朝日新聞社

●抵抗

監督/ロベール・ブレッソン
一九五六年

●黒いオルフェ

監督/マルセル・カミュ
一九五九年 [洋画 LD]

●二十四時間の情事

監督/アラン・レネ
一九五九年 [洋画 VHS]

●死刑台のエレベーター

監督/ルイ・マル
一九五七年 [洋画 LD]

●エデンの東

監督/エリア・カザン
一九五五年 [洋画 LD]

昭和三〇〜三五年に日本で公開された映画の中から選びました。

下村 千早

視覚伝達デザイン学科
(情報デザイン)

○バヤヤ王子

監督/イジィ・トルンカ
一九五〇年

子供向けの人形アニメーション。バヤヤは死んだ母の化身の白馬に導かれて王国を脅かす三匹の竜を退治して姫達を救い、愛する末娘と老父の家に帰るといふ物語。二十世紀最大の巨匠トルンカの素材で気品のあつた叙情的世界に強く引き込む。



「イジィ・トルンカ アニメーションフェア」(川崎市市民ミュージアム)カタログ

○デジタル・ハーモニー

監督/ジョン・ウィットニー

●沈黙

監督/イングマル・ベルイマン
一九六三年【洋画】LD】

○ピカドン

監督/木下連三・小夜子
一九七九年

○死者たちの声、大岡昇平
「レイテ戦記」
NHKドキュメント

立花 義遼

一般教育(心理学)

○徳川いれずみ師 責め地獄

監督/石井輝男 一九六九年

一九五〇年代の新東宝からはじまり、六〇〜七〇年代(東映・松竹・日活)の跳梁、八〇年代の沈黙の後、魔王のように復活した石井輝男を観ずして映像の美を語るなかれ、などと宣伝したところ、都内某所での上映会の唾然・呆然・爆笑・狂喜の様を伝えるリポート多数。

○銀座二十四帖

監督/川島雄三 一九五五年

○暗黒街の対決

監督/岡本喜八 一九六〇年

●妻は告白する

監督/増村保造

一九六一年【邦画】VHS】

○斬る

監督/三隅研次 一九六二年

●野獣の青春

監督/鈴木清順

一九六三年【邦画】LD】



「野獣の青春」にっかつ

イメージライブラリーには現在、およそ5000タイトルの映像資料があります。その中には皆さんの知らない作品がまだまだたくさんあることと思います。

今回、武蔵美の各学科の先生方をお願いして、「学生のうちに見てもらいたい作品。」「先生の学生時代に影響を受けた作品」を選んで紹介してもらいました。

- ライブラリーで視聴できるもの
- できないもの

長沢 秀之

油絵学科
(絵画)

●ストーカー

監督/アンドレイ・タルコフスキ
一九七九年【洋画】LD】

奇跡がなかったら生きていた甲斐がないし、逆説がなかったら笑顔の半分が消えてなくなる。今回は奇跡と逆説の六作品。「ストーカー」の最終シーンの子供は「二〇〇一年」の胎児であり、後にカスパー・ハウザーになったというのはどうだろう。あるいはティム・バートンの蒼ざめた主人公たちに・・・。



「ストーカー」にっかつ

○カスパー・ハウザーの謎

監督/ヴェルナー・ヘルツォーク
一九七五年

●奇跡

監督/カール・ドライエル

一九五五年【洋画】VHS】

○バットマン・リターンズ

監督/ティム・バートン

一九九二年

●奇跡の海

監督/ラース・フォン・トリアー

一九九六年【洋画】LD】

●ゆきゆきて、神軍

監督/原一男 一九八七年
【ドキュメンタリー】VHS】

中原 俊三郎

工業工芸デザイン学科
(イラストリアル・デザイン)

●NHK

戦後50年 その時日本は
【ドキュメンタリー】VHS】

日本はどの様に発展と遂げてきたのでしょうか?このシリーズは、これから二十一世紀を迎える日本に、種々の問題を与えてくれます。さらに、今放映中の(所蔵はありません)「NHK世紀を越えて」では、さらにグローバルに最近の社会事情をわかりやすく伝えていきます。



「戦後50年 その時日本は」日本ビクター

●NHKスペシャル

生命 40億年はるかな旅
【ドキュメンタリー】LD】

●ナショナル・ジオグラフィック

カリブ海の宝石 一九九四年
【ドキュメンタリー】VHS】

●NHK 世紀を越えて

【ドキュメンタリー】VHS】



「カリブ海の宝石」東和ビデオ

橋本 梁司

一般教育 (社会学)

- このとり、たちずさんで
監督/テオ・アングロプロス
一九九一年 [洋画] LD



「このとり、たちずさんで」バイオニアLDC

映像は時代を証すと共に、人が帰属する文化・文明の特質を的確に表現することで、普通の芸術になるのだと思う。国境が人の命を左右する今を、全編息をのむばかりの映像美で描き切るアングロプロス。その研ぎ澄まされた感性と深い知に打たれる秀作。

- ジャック・ドユミの少年期
監督/アニエス・ヴァルダ
一九九一年 [洋画] VHS
- ミツバチのささやき
監督/ピクトル・エリセ
一九九二年 [洋画] LD
- 泥の河
監督/小栗康平
一九八一年 [邦画] LD
- 芙蓉鎮
監督/シェン・チン
一九八七年 [洋画] LD
- 風の丘を越えて―西便制―
監督/イム・グオンテク
一九九三年 [洋画] VHS

宮下 勇

建築学科
(設計計画)

- 白痴
監督/黒澤明
一九五一年 [邦画] LD



はじめてみた時、ザワツとした。それは身体で感じたのだった。そこに描写された、北国は知と愛に満ちていた。雪とその風土を、その風景を、現実をとびこした次元に、写しだした画面に当時の僕は新しい希望を見つけたことをおぼえている。



「白痴」バイオニアLDC

- 幕末太陽傳
監督/川島雄三
一九五七年 [邦画] VHS
- につぼん昆虫記
監督/今村昌平
一九六三年 [邦画] LD
- 飢餓海峡
監督/内田吐夢
一九六四年
- ニッポン国 古屋敷村
監督/小川紳介
一九八二年
- 泥の河
監督/小栗康平
一九八一年 [邦画] LD

米徳 信一

芸術文化学科
(映像)

- 櫛
監督/ラザース・クエイ短編集・2
監督/ラザース・クエイ
一九九一年 [アニメ] VHS



ごくたまに、「何だ、これは？」という表現にぶつかることがある。それは今までの思考や記憶・体験といった価値基準の根幹に新たな種を植えていくのだが、それがどう育つか解らないものほど水をやるのが楽しみなんだ。この「櫛」はそんな作品です。



「ラザース・クエイ短編集 Vol.2」
ダグレオ出版

- 眠る男
監督/小栗康平
一九九六年 [邦画] LD
- テルマ&ルイーズ
監督/リドリ・スコット
一九九一年 [洋画] LD
- 風の丘を越えて―西便制―
監督/イム・グオンテク
一九九三年 [洋画] VHS
- バートン・フィンク
監督/ジョエル・コーエン
一九九一年 [洋画] LD

協谷 徹

共通彫聖
(彫刻)

- 大地のうた
監督/サタジツト・レイ
一九五五年 [洋画] LD



雨・風・雲そして人間の生と死。ひとつひとつがインドの悠然と流れる時間の中に移ろう風景として描かれた、まことに美しい映画である。西欧的な人間中心のドラマとは異なり、森羅万象が映像と音声によって丹念に綴られた表現の深さ・美しさを観てもらいたい。



「大地のうた」VIC

- 少女ムシエツト
監督/ロベール・フレッソン
一九六七年 [洋画] VHS
- 奇跡
監督/カール・ドライエル
一九五五年 [洋画] VHS
- カオス・シチリア物語
監督/パオロ・ビットリオ・タヒアーニ
一九八四年 [洋画] LD
- 紅いコーリャン
監督/チャン・イーモウ
一九八七年 [洋画] LD
- 七人の侍
監督/黒澤明
一九五四年 [邦画] LD

編集委員

板屋 緑一映像学科 教授
下川久美香
狩野 志歩
木村美佐子
田中友紀子

イメージライブラリー・ニュース 第3号 2000年4月発行

武蔵野美術大学 イメージライブラリー
〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
TEL / FAX 042-342-6072
禁無断複製・転載